

第1章

オリエンと地中海世界

第1章では、オリエンとおよび地中海周辺地域の古代文明をとりあげる。古代文明のうちでもっともはやく成立したオリエン文明では、インダス文明や中国文明と同じく、大河の治水・灌漑にもとづく神権政治が行われ、その政治形態は一部、後世のイスラーム世界にも引きつがれた。文化的にはエジプトの太陽暦、メソポタミアの六十進法、フェニキアの表音文字などがヨーロッパに伝えられ、パレスチナに誕生した一神教はのちにキリスト教を生み出した。またオリエン文明の影響をうけて東地中海沿岸に誕生したエーゲ文明では、いくつかの王権が小王国を支配していた。

エーゲ文明崩壊後に出現したギリシア文明は、ポリスという独特の社会のしくみから生まれた。ポリス社会は、奴隷制がその経済的基盤ではあったが、専制王権がなく、独立した自由な市民たちの共同体であった。そこでは上からの命令ではなく、対等な議論による説得が人びとに行動に向かわせた。ここから直接民主政が発生した。市民の自治に根ざしたポリス社会は、古代地中海世界の基礎となると私生活の原型となり、また人間中心的で合理主義的な精神文化をうみだした。

ギリシアの影響を受けてイタリアに誕生した都市国家の一つのローマは、強大な軍事力を背景にやがて地中海周辺全域を統一した。ローマ帝国は以前からあったさまざまな文化・文明・民族を、地中海世界という一つのまとまりのなかに統合・吸収し、都市を中心にギリシア文化を継承発展させて植えつけた。「ローマの平和」のもとで繁栄したローマ文明は、その後のヨーロッパ文明の直接の母体である。一方、ローマ帝国に急速にひろがったキリスト教は、ギリシア文化とともにヨーロッパ思想の重要な源流となった。

第2章

アジア・アメリカの古代文明

第2章では、インド以東のアジアおよびアメリカの古代文明を取り上げる。オリエン文明にややおくれ、インダス川流域や黄河・長江流域でも農業を基礎とする都市文明が発達した。インダス文明は500年ほど栄えた後おとろえ、その後牧畜民アーリヤ人が西北インドに侵入し、ガンジス川流域に移動する過程で、今日にいたるインド世界の骨格をなす宗教・社会構成・世界観が形成された。バラモン教をはじめ、仏教・ジャイナ教・ヒンドゥー教という、その後の信仰のあり方に大きく影響を与える宗教もうまれた。

東南アジアの諸地域は、あたたかくおだやかな海を通じて、はやくからインドや中国と交流し、その影響を受けながら独自の文明を形成してきた。しかし大きな帝国によって統合されることはなく、それぞれの自然条件に応じた小規模な国ぐにが、ヒンドゥー教や仏教などの宗教を受け入れながら繁栄した。

中国では、黄河流域の都市文明のなかから殷王朝、ついで周王朝が成立して華北を支配した。その後春秋・戦国時代の動乱のなかで、中央集権的な政治体制や、儒教をはじめとする新しい思想が形成された。前3世紀末の秦による中国統一をへて、つづく漢の時代に、20世紀初めまでつづく皇帝政治体制の基礎がかたまった。

これらユーラシア大陸の文明とは独立に、アメリカ大陸の中部・南部でも、トウモロコシなどの農耕を基礎とする都市文明が形成され、メキシコやアンデスの高原地帯を中心に

強力な諸国家を作りあげた。

第3章

東アジア世界の形成と発展

第3章では、漢滅亡後の魏晋南北朝の分裂時代から元朝による南宋の征服にいたるまでの、千年あまりの東アジアの歴史をとり扱う。

この時期の前半の3～6世紀は、北方諸民族の諸王朝が華北を舞台につぎつぎと興亡し、南にのがれた漢族の王朝もひんぱんに交替する、分裂と動乱の時代であった。しかし、そうした動乱のなかで、のちの隋・唐につながる新しい体制の基礎がきずかれる。諸民族が入りまじる状況のもと、北方・西方の要素をとりいれた、普遍性のある文化が成熟してきた。仏教がひろまり、道教が体系化され、従来の規範にとらわれない自由な精神活動が貴族によって重んぜられたこの400年間は、中国文化の幅が大きくひろがった時期であるといえる。

その新しい文化を基礎に成立した隋・唐の王朝は、中国全土を統一するとともに、整然とした国家体制をつくりあげ、周辺諸国にも大きな影響を与えた。首都の長安は、壮大な都市計画のもとにつくられ、アジア諸地域の人びとが集まる国際都市であった。分裂の時期に国家形成をはじめていた日本・朝鮮など周辺諸国では、唐に使節や留学生をおくってその制度をとり入れ、中央集権的な国家体制を整備していった。

唐の整然たる制度がくずれて滅亡の道をたどり、五代十国の動乱をへて宋が成立するまでの時期は、中国史上有数の大きな変革期といわれる。唐を中心とした東アジア文化圏の統合がゆるみ、それぞれの地域が独自の特色を持つ国家をつくってゆくのがこの時期であった。中国でも、貴族が没落し、科挙によって登用された文人官僚が皇帝の集権的な統治をささえる、独特の国家体制が成立した。

第4章

内陸アジア世界の変遷

ユーラシア大陸の北部・中央部の草原・砂漠地帯には、これまでの諸章で扱った地域とは風土・生活をことにする、遊牧民・狩猟民やオアシス民の世界がいろがっている。第4章では、トルコ民族とモンゴル民族の動きを中心として、14世紀頃までの内陸アジアの動きを解説する。

6世紀以降、突厥やウイグル人がモンゴル高原と中央アジアに進出すると、内陸アジア世界にはトルコ系の要素が加わるようになった。オアシス地帯にもトルコ語がひろまり、中央アジアのトルコ化が著しく進んだ。西方に移住したトルコ人は9世紀頃にイスラームと接触し、あいついでイスラーム国家を建設した。

トルコ系民族の西方への移動後、モンゴル高原を起点にモンゴル民族が急速に勢力をのばし、ユーラシアの大半をおおう大帝国を建設した。13世紀から14世紀前半は、モンゴルの支配のもと、ヨーロッパから東アジアにいたるユーラシア大陸の全域で、経済・文化の広域的な交流が進んだ時期であった。

第5章

イスラーム世界の形成と発展

第5章では、7世紀から16世紀初めにいたるイスラーム世界の展開をたどる。イスラーム教は、ユダヤ教やキリスト教の影響を受けて誕生した厳格な一神教である。アラブ人のイスラーム教と(ムスリム)は、約1世紀の間に東は中央アジアから、西はイベリア半島にいたる大帝國をつくりあげた。11世紀以降は北アフリカのベルベル人の改宗が進み、内陸アフリカにもイスラーム教がひろまった。またインドにもイスラーム勢力が侵入して王朝を建設し、さらに13世紀以降になると、商人や神秘主義者の活動を通じて東南アジアの諸島部にもイスラームが浸透した。

ウマイヤ朝時代にはアラブ人だけが特権階級であったが、アッバース朝時代になってイスラーム法がととのえられると、平等の原則が支配的になった。しかし、まもなく地方政權の樹立によってイスラーム帝國は分裂し、アッバース朝カリフの權威はしだいに低下した。

西アジアのイスラーム社会では、はじめ官僚や軍人に國家から俸給が支払われていたが、カリフ權力がおとろえると、軍人に土地からの徴税權をあたえ、直接農民や都市民から徴税されるイクター制が各地にひろまった。

イスラーム文明は、先進文明とイスラーム教・アラビア語とが融合してうまれた都市文明である。9世紀以降、ギリシアやインドから学んだ自然科学・数学の成果は、ヨーロッパにも大きな影響をあたえた。またムスリム商人は、中国・インド・ヨーロッパを結ぶ交易活動により、文明の交流にも重要な役割を演じた。

第6章

ヨーロッパ世界の形成と発展

第6章では、西ローマ帝國がほろびた後、ヨーロッパが中世とよばれる時代にはいつから千年ほどの時代を扱う。西ローマ帝國滅亡とゲルマン人の大移動・建国の後、7世紀のイスラーム勢力の西進をきっかけにして地中海世界はまとまりを失い、やがて東ヨーロッパ世界・西ヨーロッパ世界・イスラーム世界の三つの世界的世界に分裂した。

東ヨーロッパではビザンツ帝國(東ローマ帝國)がローマ帝國の傳統を引きつぎ、皇帝はギリシア正教會を服従させて中央集權的一元支配を維持した。スラヴ系諸民族もギリシア正教とビザンツ文化の影響下で自立・建国し、ビザンツ帝國とともにギリシア＝スラブ的世界を形成した。

一方、西ヨーロッパではローマ＝カトリック教會がフランク王國と手を結び、ギリシア正教とビザンツ帝國に対抗した。カールの戴冠は、ローマ＝ゲルマン的西欧世界の獨立を象徴するできごとであった。また民族大移動後の長い混乱期は、封建的主従関係と莊園という独自のしくみをもつ封建社会をうみだした。こうして出現したのが西ヨーロッパ中世世界である。

封建社会は11～13世紀に最盛期をむかえた。農業生産が増大し人口が急増すると西ヨーロッパは拡大を開始する。その拡大のエネルギーを爆発的に噴出させたのが、十字軍である。十字軍はけっきょく失敗に終わったが、これをきっかけに東方貿易が拡大して都市と商業はふたたび繁榮をむかえた。貨幣經濟が浸透すると農民の地位は向上し、莊園にもとづく經濟体制は崩壊へと向かった。また教皇權が衰退するのと逆に王權は強まり、そ

のなかから中央集権をおしすすめた各国は、近代的国民国家形成に向けて一步をふみ出すのである。

第7章

諸地域世界の交流

ユーラシア大陸では、騎馬遊牧民が活躍した北方の草原の道、その南のオアシス諸都市を結ぶオアシスの道、それに船による物資の運搬がおこなわれた南方海上の海の道が、東西文化の交流と発展に大きな役割をはたしてきた。

とくに海の道は、8世紀にムスリム商人がインドや東南アジア・中国に進出し、さらに10世紀以降、中国人が東シナ海・南シナ海に進出してから大いに発展した。東アジアの海洋世界では、明の海禁政策によって中国人の海外活動がおとろえると、倭寇がふたたび活動を開始し、琉球や日本も積極的な通商政策にのりだした。インド・東南アジアと地中海を結ぶ地域では、イスラーム諸王朝が交易の主導権をにぎり、ムスリム商人の活躍がめざましかった。イスラーム世界とヨーロッパを結ぶ交流は地中海を舞台に展開され、ムスリム商人とイタリア商人の通商活動ばかりでなく、イスラームの学問や技術も地中海をへてヨーロッパに導入された。

第8章

アジア諸地域の繁栄

モンゴル帝国の崩壊後、アジア諸地域には新たな国家が成長してくる。16世紀以降の国際商業の活発化は、これら諸帝国の経済と文化の発達をうながした。豊かな富を求めてアジアに進出したヨーロッパ人は、現地国家の管理のもとでさかんな交易や文化交流をおこなった。

第8章では、14世紀から18世紀ころまでのアジア諸地域の動向をとり扱う。本章で扱う主な国家は、東アジアにひろい朝貢体制をつくりあげた明と、それにつづき17～18世紀に中国本土からモンゴル地方・東トルキスタン・チベットにおよぶ広大な支配領域を形成した満州民族の清王朝、14～15世紀に中央アジア・西アジアで栄えトルコ＝イスラーム文化を形成したティムール朝、ビザンツ帝国をほろぼし16世紀以前に最盛期を迎えたオスマン帝国、イランを支配してオスマン帝国に対抗したシーア派のサファヴィー朝、そして、16世紀初めから19世紀にいたる聴器の支配を実現し、莫大な富を基盤にタージ＝マハルなどの豪華な建造物を残した南アジアのムガル帝国である。

第9章

近代ヨーロッパの成立

第9章では、15世紀末から17世紀前半の近世・近代初期のヨーロッパをとりあげる。15世紀末から、ヨーロッパ人は海外進出にのりだし、「大航海時代」をきずいた。そこから世界の一体化がはじまり、その結果、ヨーロッパの経済・社会も大きく変化した。

この時期には、思想・芸術・科学などの文化の領域でも、新しい動きがあらわれた。人間性の自由・解放を求め、各人の個性を尊重しようとするこの文化運動をルネサンスと呼び、中世盛期の文化とくらべて、現世に生きる楽しみや理性・感情の活動がより重視され

た。

16世紀には、カトリック教会を批判する動きがドイツからヨーロッパ各地にひろまり、この宗教改革に対して、カトリック教会も内部革新にとりくんだ。その結果、人びとの信仰が内面化され、各国の教会はそれぞれ個性を強めて、世俗の政治秩序も大きな影響をうけた。

こうしたできごとを背景に、15世紀末から17世紀前半に、ヨーロッパの国々には、従来よりも強固なまとまりを獲得し、独立した主権国家としてたがいに対立と妥協を繰り返しながら、一つの国際秩序を形成していった。16世紀にはスペインが全盛であったが、17世紀前半にはヨーロッパ全体が危機の時代をむかえ、そのなかで、あらたにオランダ・イギリス・フランスなどの国が有力となっていった。

第10章

ヨーロッパ主権国家体制の展開

第10章では、17世紀なかばから18世紀後半にいたる時期のヨーロッパをとりあげる。諸国家は国富増大をめざして重商主義政策をとるようになり、さらに有力国は植民地をめぐるヨーロッパの内外で争いをくりかえした。それまで以上に緊密化した海外とのつながりを背景に、18世紀にヨーロッパはふたたび成長期をむかえた。

この戦争の時代に急速に成長したのがイギリスで、17世紀のイギリス革命によって、議会主権にもとづく立憲王政を確立した。大陸では、フランス・オーストリアが強大であったが、やがて君主主導で上から改革を進める啓蒙専制主義の体制をとったプロイセン・ロシアもこれにならぶようになった。これらの諸国は主権国家のなかでもぬきん出た国家となり、やがて相互に協議して重要な国際問題を決定する列強となった。

18世紀には、ヨーロッパのアジア進出において、領土支配が重視されるようになった。イギリスとフランスの戦いはイギリスの勝利におわり、イギリスはインドに勢力をきずいた。また、アメリカでは、ラテンアメリカの大半はスペイン領であったが、北アメリカにはイギリスの13植民地が成立した。このアメリカとヨーロッパ、アフリカをつなぐ三角貿易は、ヨーロッパの経済・社会にとってきわめて重要であった。

17～18世紀のヨーロッパでは、自然界の研究がすすみ、現代的な世界観が成立し、合理的な知を重んじる啓蒙思想が有力となった。この時期には、王侯の宮廷生活との結びつきを深めた宮廷文化とともに、豊かな消費生活をおくる市民層がささえる市民文化が開化した。

第11章

欧米における近代社会の成長

第11章では、18世紀の後半におこり、欧米諸国の外部世界への影響力をいちだんと強める契機になった「二重革命」、すなわち産業革命と、アメリカ独立革命・フランス革命をとりあげる。

工業生産の様式を機械制工業にかえ、資本主義の確立した産業革命は、まず、広大な海外市場を確保していたイギリスでおこった。産業革命は綿工業からほかの産業部門にひろがり、交通革命ともなった。「世界の工場」となったイギリスは自由貿易によって世界市

場形成に主導的役割をはたし、アジア・アフリカ・ラテンアメリカなどを従属的地位においたが、やがてほかの欧米諸国や日本も産業革命に突入し、イギリスの優位は失われた。

アメリカの独立革命は近代民主政治の基本原則を表明してイギリスからの独立を達成し、フランス革命は多様な社会層の複雑なからみあいのなかで、旧制度の廃棄と政治的発言力を有産市民層にもたらした。フランス革命で成立した共和制はナポレオンの帝政に席をゆずるが、ナポレオンのヨーロッパ大陸支配は各地域で改革をうながした。これら両革命は、近代市民社会の原則を提起するものであった。

第12章

欧米における近代国民国家の発展

本章ではナポレオン没落後の19世紀の欧米諸国を対象にする。

1815年に成立した国際秩序はイギリスとロシアにささえられ、19世紀前半にはヨーロッパで大規模な戦争は起きなかった。しかし、自由主義とナショナリズムをおさえようとするウィーン体制から、自由主義的なイギリスは距離をおき、フランスでも1830年に七月革命がおこった。さらに、1848年には、フランス二月革命・ドイツ三月革命など、ヨーロッパの広範な地域で自由主義とナショナリズムの高まりを示す事件が起こり、ウィーン体制は崩壊した。

19世紀後半にはいるとヨーロッパは好況期をむかえ、世紀末にかけて、各国で大衆の政治参加がすすんだ。他方、クリミア戦争におけるロシアの敗北によって、国際秩序は大きく動揺し、それ以後、イタリアやドイツの統一が軍事力によって実現された。1870年代には、ドイツの宰相ビスマルクが、あらたな国家体制の構築に努めたが、列強間の利害対立は深刻であった。

この間、アメリカ合衆国は発展を続け、その領土は太平洋岸に達した。しかし、奴隷制をめぐる南部と北部の対立が激化し、1861年には南北戦争に突入した。統一が回復された後、アメリカでは工業が躍進し、19世紀末にはイギリス・ドイツをしのぐ世界の工業国となった。

文化の面では、19世紀の前半にはロマン主義がさかんであったが、後半になると、市民社会の成熟、科学・技術の急速な発展の影響を受けて自然主義がひろがった。資本主義の先頭にたったイギリスと、それにたいこうしたドイツでは、社会科学においてもことなる潮流がみられた。産業とのかかわりが深い科学・技術の領域での進歩も著しく、人びとの日常生活もその影響を受けて便利になった。

第13章

アジア諸地域の動揺

アジアの諸帝国は17～18世紀以降、しだいに弱体化して分裂の傾向をみせはじめる。それとともに、ヨーロッパ勢力の干渉・植民地化の動きも本格化していった。

オスマン帝国は19世紀にはいつてからは諸民族の独立運動とそれにとまなうヨーロッパ勢力の干渉に苦しめられ、インドでもムガル帝国の錐体に乗じて18世紀なかば以降、イギリスが領土支配をすすめた。清朝でも19世紀なかばのアヘン戦争以後、対外戦争と内乱が続き、国力がおとろえた。第13章では、19世紀を中心とするこれらアジア諸地域の動

向を扱う。

こうしたヨーロッパ諸国の進出に対して、アジア諸国ではさまざまな対応のしかたがみられた。ヨーロッパの影響下に技術や政治体制を導入して政府主導で近代化をすすめる方向もあれば、イスラーム教やヒンドゥー教、あるいは民間信仰や新宗教を基盤に外国の侵入に抵抗しようとする知識人や民衆の運動もあった。これらの流れがからみあい、たがいに影響をあたえながら、アジアのナショナリズムが形成されてゆく。

第 14 章

帝国主義とアジアの民族運動

本章では、19 世紀後半から第一次世界大戦までの時期における世界の動向を扱う。19 世紀末になると、欧米先進諸国では第 2 次産業革命とよばれる技術革新が進行し、銀行と結んだ大企業が市場を支配する傾向があらわれた。欧米列強は、巨大な生産力と科学技術、軍事力の優勢を背景に、アジア・アフリカ、さらに太平洋地域につぎつぎと植民地や勢力圏(半植民地化地域・従属地域)を設定した。この動きが帝国主義であり、植民地・従属地域は諸資源の供給地、資本輸出地とされ、地球全体が資本主義体制に組み込まれて名実とともに世界の一体化が実現した。

帝国主義諸国では、技術革新による工業化が十分すすむまで、労働者に貧しい生活をしていたり、国民の一部を移民として国外に送り出したりしたため、それに抗議して社会主義をめざす労働運動が勢力をのぼした。やがて、国家や企業が労働条件改善をある程度認め、ヨーロッパ文明の優位を強調すると、国民のあいだには帝国主義を受け入れる傾向もあらわれた。列強は帝国主義政策の競合から、20 世紀にはいると、イギリスなどの古くからの植民地保有国家と、ドイツなどの好発帝国主義国家陣営とにわかれて対立するようになった。

一日孟、帝国主義国の圧力にさらされたイスラーム世界やインド・中国、あるいはラテンアメリカ地域では、政治改革や社会・経済の近代化を推進して、外圧に対抗して自立しようとする運動が起こった。そのなかから、中国の辛亥革命やメキシコ革命など、20 世紀の民族主義運動を先導する潮流があらわれた。

第 15 章

二つの世界大戦

この章は、二つの世界大戦にはさまれた時期の世界をとりあげる。帝国主義諸国間の覇権争いから始まった第一次世界大戦は長期化して総力戦になり、参戦各国では国民の協力をえられる政治・経済体制への転換が必要になった。ロシアの専制体制はこれに対応できず、ロシア革命が起こった。レーニンらがかかげた社会主義という未来像は世界に衝撃をあたえ、アメリカ合衆国のウィルソン大統領は、それに対抗して十四カ条の講和原則を出した。

パリ講和会議ではヨーロッパでの民族自決権が認められ、国際連盟を中心とするヴェルサイユ体制が成立した。ヴェルサイユ体制はアジア・太平洋地域のワシントン体制とともに、1920 年代の国際秩序を形成した。この間、中国をはじめアジア諸地域では、近代化を推進して、欧米列強に対抗しようとする動きがはじまり、ロシア革命に鼓舞されて、自力

解放と独立をめざす民族運動が台頭した。

1920年代中期には、西ヨーロッパ諸国は戦後の政治・経済危機をおりこえ、国際協調がすすんだが、イタリアではファシズム体制が成立し、東欧・バルカン地域の振興独立国では農業不況などから民主政治は後退した。

1929年の世界恐慌は、資本主義世界をゆるがした。米・英・フランスはブロック経済政策で対応したため、国際経済はさらに縮小し、国際協調の機運はおとろえた。日本・ドイツ・イタリアの好発資本主義国はファシズム・全体主義体制をとって、他国への侵略による危機克服に向かい、第二次世界大戦をおこした。反ファシズム諸国は連合国にまとまり、ファシズム諸国の敗北を決定づけた。連合国の勝利にもっとも貢献したアメリカ合衆国とソ連は、戦後の世界で指導的地位に立つようになった。

第16章

冷戦とアジア・アフリカ世界の自立

この章では、第二次世界大戦から1970年初めまで、ほぼ4半世紀間の世界を対象にする。第二次世界大戦後、国際連合による国際平和秩序の実現が期待されたが、世界は米ソ両大国を中心とする東西両陣営に分裂した。ヨーロッパでの東西分立、アジアでの武力衝突の後、両陣営の対立は核の脅威のもとに米ソ直接対決をさけ、世界的な軍事ブロックを結成して向きあう冷戦になった。

アジア・アフリカの新興独立国からは、東西対立に巻き込まれず自立的立場をまもるために、平和五原則の提唱やアジア＝アフリカ会議の招集、非同盟勢力の結集などの試みがなされた。アフリカの植民地の多くも、60年代にはほとんどが独立した。第三世界の躍進は、戦後世界の重要な特徴となった。

アメリカ合衆国の援助によって、日本・西欧の資本主義世界では、1950年代から急速に経済復興が実現し、以後20年間にわたる高度成長期のなかで、アメリカ型の現代社会へと移行した。ソ連はスターリン批判の後、自由化と平和共存路線に転じたが、東欧圏の改革の動きは武力で封じた。60年代にはいると、ソ連と中国の対立が激化して、社会主義圏の統一性は失われ、また社会主義圏の経済停滞のきざしもあらわれた。一方、アメリカ合衆国もベトナム戦争に介入して内外から批判され、ECと日本の経済的挑戦に直面した。1970年代初め、冷戦体制はゆるみはじめ、合衆国の動揺と石油危機によって、世界経済は多極化へと向かうが、先進工業国と発展途上国との格差が南北問題として深刻化した。

第17章

現代の世界

この章は、20世紀最後の4半世紀の世界と20世紀全体の文化を扱う。1970年代にはじまった米・ソ両国の軍縮と緊張緩和の流れは、ソ連のゴルバチョフの登場でいっきょに進展し、ソ連は内部から分解消滅した。同時に、東欧社会主義圏でも民主化革命が起こり、東ドイツは西ドイツに吸収され、東欧社会主義圏は解体し、そこから多くの民族国家が出現した。アジア・アフリカ・ラテンアメリカでも、開発独裁・長期独裁政権・少数白人支配はその数を減らし、民主化の波がひろまっている。

世界経済はアメリカ合衆国・西ヨーロッパ・日本の三極構造となり、発展と途上地域で

は南北問題と南南問題とが重層的にもつれ合う、複雑な状況があらわれている。冷戦解消後、国際平和への期待が高まったにもかかわらず、各地域の長年の不満や抗議が、地域覇権戦争・宗教運動・民族運動・地域自立運動など多様な形態で噴出し、当該政府や国際連合を困惑させている。しかし一方では、国連の非政府組織（NGO）や民間ボランティア団体が国際連合を支え難民救援や医療活動、地域社会再建で重要な貢献をはたしている。

20世紀は科学の時代であり、その加速度的発展は人びとの生活空間や価値観を日々変容させながら、現代文明を構築してきた。しかし、それは一方で資源の大量消費・大量破壊をとめない、地球規模での環境汚染・環境破壊を引き起こしている。こうした問題の解決は、現代文明の最大の課題となっている。